

やなせたかし 責任編集
投稿詩とイラストレーション

詩とファンタジー

秋茜号

2011 No.16

かまくら春秋社

特集 サトウハチローの秋・東北・抒情

被災地からの応募 「手のひらを太陽に」つなごう 心と心プロジェクト 入選詩発表



シリーズ
少年
たごう「とき

溺愛の負い目

志茂田景樹

北村人 ● 絵

五

歳のときに十五歳上の兄が戦死し、
父母に姉二人の家庭で育った。上の
姉とは十二歳、下の姉とも八歳離れ
ているから、小学生の頃は姉たちがずいぶん大
人の女に見えた。

その姉たちはいまだに、
「あなたは溺愛されて育ったから」
といった言い方をする。

僕にはそんな意識はなく、両親にはことごと
に干渉されて、それに耐えながらよくぞここま
で成長したという思いが強い。

ところで、僕を両親に溺愛されて育ったと口
をそろえて言っているようでも、姉たちの思い
はそれぞれに異なっている。穏やかな性格の上
の姉は溺愛されてわがままに育ったけど、他人
を押しつけるところがなくておっとりしている、
と半分否定、半分肯定のニュアンスがこもる。

勝ち気で両親に反発するところがあつた下の姉
の場合は、あなたは可愛がられていい思いをし
たけれど、私は叱られてばかりいた、と何十年
経つても羨望の気持ちか滲む。

下の姉はかなり派手な性格で、社会人になり
たての頃、当時としては珍しい白いエナメルの
ハイヒールを履いていた。

玄関の床に置かれると、それは父母や、上の
姉の地味で粗末な靴々を睥睨と見下し、子ども
の僕でさえ、ああ、掃き溜めに鶴だなあ、とす
ぐに思い、しばらく見とれていたほどだった。

お固い国鉄職員だった父がそのハイヒールを、
何だ、こんなもの、と庭へ放り捨てたのはその
すぐあとのことで、夜の庭を必死で探しまわっ
た下の姉の姿は今でもくつきり目に浮かぶ。

この姉に溺愛どころか拷問に耐えて育つたよ
うなものだなどと言おうものならパンチが飛ん

でくるから死ぬまで言わぬ。

学校の行事でいやなもの運動会、授業参観
日、遠足につきた。いずれも親がくるからであ
る。運動会は父母そろってくるが多かった
が、授業参観は母がいつも一人できた。

後ろで黙って見ていればいいものを、鼻をぐ
ずぐずさせれば、

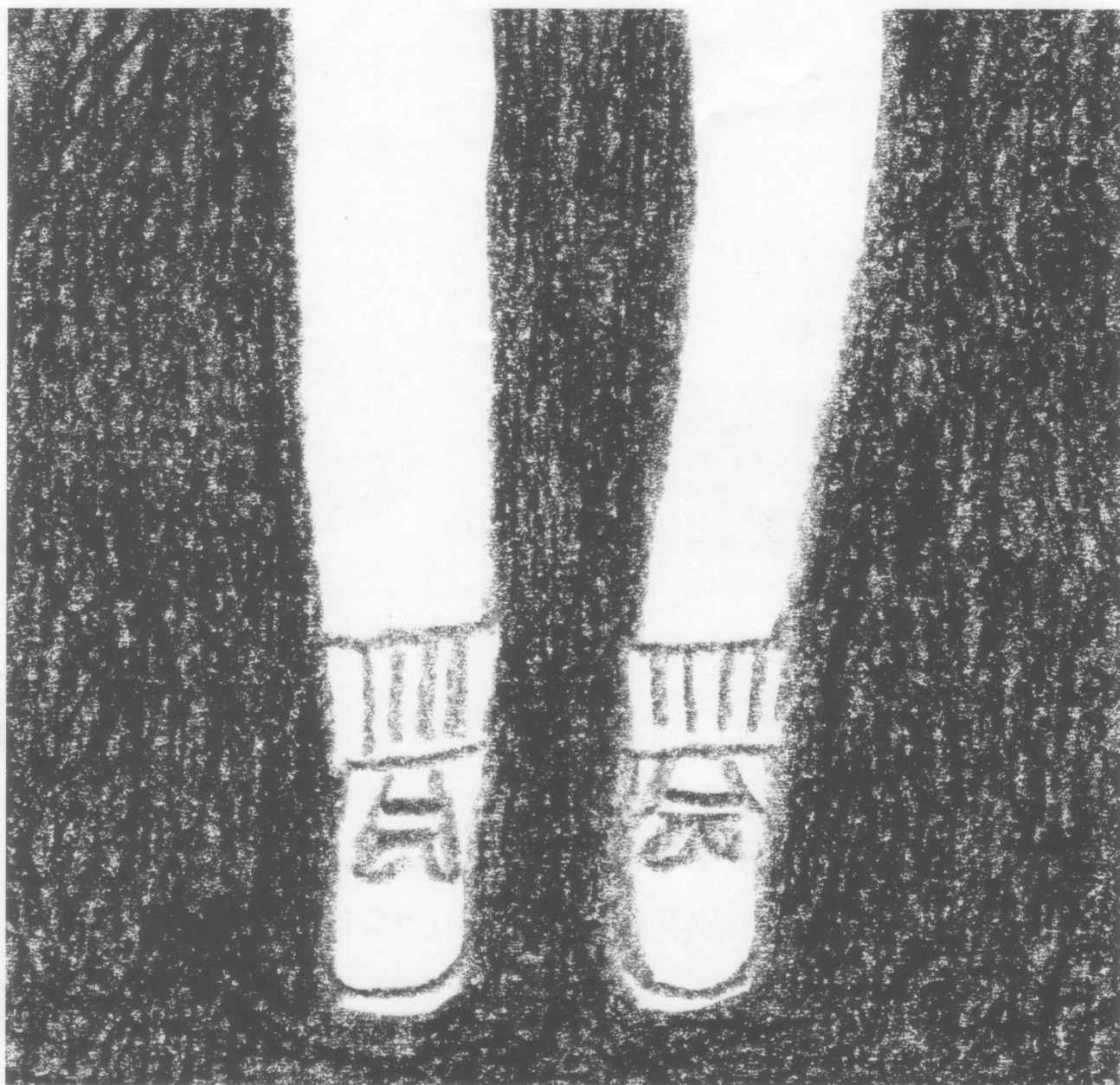
「さあ、お涙をかみなさい」

と、すぐ素っ飛んでくる。ノートに何か書き
取るときにはすぐ後ろにきて、

「ちゃんと書けるの」
と、案じる。

先生がそんな突出した母の行動に奇異な目を
向けることがなかったのは、うちの子は体が弱
いものですから、と充分に釘を刺していたため
である。

お蔭で先生まで憐憫の視線を投げてきた。



こんな状態で授業が頭に入るわけがなかった。遠足は父が必ずついてきた。わざわざ休暇をとったのかもしれない。小学校も三、四年生になると、親がついてくる同級生なんかいやしない。少し坂道になると父は屈んで背中を向け、

「さあ、おぶさんな」

だもの。恥ずかしくて恥ずかしくて。

男の誇りをとても意識する年頃だったんだから。

鎌倉へ遠足に行ったときは、なんとなんと父母がそろってついてきた。いやあ、今、思い出しても、このときほど同級生に対し屈辱感を覚えたことはなかった。

両親に挟まれてベンチにかけ、弁当を食べた。稲荷、海苔巻、卵焼きとメニューはありありと思いつかぶけど、このときの味の記憶がまるで残っていない。

先生までが目の前に立って、

「シモダ君は恵まれているな。大きくなったらお父さんお母さんに親孝行しなくちゃな」

と、拷問の仲間に加わった。

その父母が世を去って久しい。お父さんお母さん、お蔭で僕の頭はレインボーカラーです。ろくに親孝行もできなかったけど、人様に迷惑かけるな、と教えられたその言葉だけはずっとずっと守ってきましたよ。